Sym. 3 沖縄県におけるハブクラゲ等海洋危険生物

3. 応急処置と治療

宮城良充（沖縄県立中部病院地域・救命救急科）

Box-jellyfish, *Chiropsalmus quadrigatus* and other dangerous marine animals in Okinawa Prefecture 3. First aid and medical treatment

Miyagi Y. (Okinwa Chubu Hospital, Emergency Department)

【はじめに】 本県は我が国唯一の亜熱帯海洋性気候のなか、平均22.4度の温暖な気候の中のもと、青い珊瑚礁の海を求めて年間300万人の観光客が訪れている。そのような海洋レジャーを楽しむ中、海洋生物による刺咬症の被害例が増えてきている。ほとんどの症例は軽症であるが、沖縄近海に生息するハブクラゲ [*chiropsalmus quadrigatus*] 刺症によって1997年、1998年と続けて死亡患者の発生をみたため、当地ではその予防対策や応急処置や治療に関心が高まっているところである。我々が現在市民に指導している応急手当と治療法を提示するが、即内地での海洋生物の刺傷に应用できるのか検証されてはならず、今後各地での研究が待たれる。

【刺傷の分類】 応急処置と治療に直結するような分類をとっている。外傷群（創が大きく、毒はないが創そのものが問題となるもの）、神経毒群（毒が神経系に作用し麻痺症状がでるもの）、刺棘毒群（体の棘に毒を持ち、疼痛が激しいもの）、刺胞毒群（触手に刺胞を有し毒を注入するもの）、搔痒群（体の剛毛に毒があり搔痒が強いもの）の5群に分ける。

【応急処置】 外傷群（サメ・ダツ等）では組織欠損や出血などを来す。出血に対しては圧迫止血し、刺入した異物は取り除かず急いで病院へ搬送する。神経毒群（ウミヘビ・アンボイナ等）では緊縛、吸引し病院へ、刺棘毒群（オコゼ・ウニ・ヒトデ等）は刺された直後より激しい痛みを生じる。応急処置として42℃前後の温湯に浸す。刺胞毒群（クラゲ・イソギンチャク等）では触手の触れた個所に赤い有痛性の膨隆疹を生じる。直ちに食酢を2リッターふりかけ、触手を除去し氷で冷やす。但し、イソギンチャクは食酢は禁忌で冷やししながら病院へ搬送する。搔痒群（ウミケムシ等）毛が刺さってかゆみを生じる。セロファンテープで毛を抜き取る。

【治療】 外傷群は外傷一般の原則に基づいて治療をすすめる。残る4つの群は現在のところ、毒に対する抗毒素血清が手軽に使用出来ない所以对症療法が主となる。神経毒群では骨格筋の麻痺から呼吸困難を来すことがあるので、時として人工呼吸器を必要とする。刺棘毒群は除痛が主となる。経口鎮痛剤では効果なく、鎮痛剤の静注や神経ブロックでないと効果ないことが多い。ウニの棘が異物として残ることがあり、軟部レントゲン写真を撮る。患部は安静挙上する。刺胞毒群の患者が最も多いがほとんどが軽症である。痛みは経口鎮痛剤で対処し、皮疹に対してはステロイド軟膏を処方して帰宅させる。重症例や過去に死亡した例で共通することは、全例小児で応急処置を間違えていることである。特に死亡した2例とも直ちに心肺停止を来している。これは、刺胞から注入された毒素が中枢抑制あるいは直接心筋に作用するのではといわれている。バイスタンダーによる心肺蘇生が救命出来るかにかかっている。搔痒群では搔痒にステロイド軟膏の塗布が有効である。

【おわりに】 ハブクラゲ刺症にて死亡例が出ていることから、今後は根本治療ともいべき抗毒素血清の開発が必要となってくる。これと合わせ、正しい応急処置の指導と心肺蘇生法の普及も海洋生物の治療の重要な根幹をなしていることを認識し、関係機関は努力するべきである。